

Eureka XII

六年制通信 No.31 令和6年12月13日(金)号

最後まで頑張れ

あとだいたい一か月ですか、共通テストまで。六年生の諸君、頑張rinaさいよ。体調管理能力も含め、受験は君の力を公平に判断してくれます。昔からある純粋な学力試験を受けて判定された君の学力は、これが自分の「今の」学力なのだと信じていいと思います。特に記述を伴う試験は「今の」学力を正確に反映してくれます。

君たちは国公立大学を受けるように、というか受験勉強の初期の段階から国公立大学を目指すように指導されると思います。いわゆる進学校かどうかの指標としても、国公立大学への進学率が使われるのが現実です。現役合格率が50%を越えていると進学校としていい評価を下される、そんな感じです。私はあまり国公立大学に行きなさいと言ってこなかったと思います。正直に言って、自分自身もそうでしたし、好きなところに進学すればいいと思っていますから。行きたい大学が見つかったのなら、そこを目指すのが当たり前ですからね。もちろん、昔から言われているように国公立大学の方が伝統的に研究施設が充実している、学費が安い、教授一人が担当する学生が少人数でも講座が開講されるなど、国公立大学の優位性はあると思います。それから地方の国立大学には、まあ三重大大学もそうですが、学力的には都会のもっと入学の難しい大学に入れる力を持ちながら何らかの事情で地元に残っているというような学力の高い学生が時々います。前期で東京大学に合格し、後期で三重大大学に合格し、結局三重大大学に進学した生徒もいます。君もひょっとしたら自分よりもできる学生に出会えるかもしれませんね。このように国公立大学のいいところはたくさんあると思いますが、それと同じくらい私立大学には私立大学のいいところがあるに決まっていますから、要は進学した先で勉強を続けられればいいのだと思います。

ただし、国公立大学に進学はしなくてもいいのですが、受験はしてほしいと思っています。そして合格してほしいと思っています。理由はいくつかあります。まず、国公立大学の入試は機会が限られているということ。私立大学は手を変え品を変え同じ学部を何度も受けられるシステムがあります。やり直しがきくのですね。しかし国公立大学はせいぜい二回しかありません。しかも後期は定員が少なくなつて(受験生も減りますけどね)、合否が読みにくくなると思います。つまり後期で受かることを見越して前期にチャレンジするというのは本当のチャレンジで、多くの受験生は行きたい大学は前期で受けることになると思います。ざっくり言えば、一度のチャンスに挑むプレッシャーに耐えて勉強するわけで、それが君たちの精神を鍛えてくれます。次に、当然ながら共通テストを通過しなくてはなりません。「情報」が入って6教科8科目を受

ける必要があるのですから、例えば私立大学の3教科受験に比べると全体的な勉強量は大幅に増えます。不得意とか苦手とか嫌いとか言っていられないわけです。国公立大学の卒業生は総合的な学力が担保されていると解釈されるのはこのためです。科目が多いので自分の得意不得意をよく理解した上で計画的に、しかも粘り強く勉強しないといけません。個別試験（二次試験ね）を念頭に置きつつ共通テストの勉強をするのですから大変です。つまり国公立大学の受験を通して計画性とか辛抱強さが君たちの身につくと思うのです。そしてそれらは、のちのちきっと君たちを助けてくれると信じます。また、共通テスト明けの個別試験は記述試験が普通です。この、選択問題ではない記述試験が最も正しく君の学力を判定してくれます。書いた記号がたまたま当たったような「まぐれ」のない解答ですからね。昔の英語の試験なんて、英文和訳と英作くらいでした。本当の学力がないと太刀打ちできない問題が出たものです。こういう個別試験に挑むことには意味があると思うのです。しかも結果は卒業式が終わってからだし、後期を受けるなら結果はもっと先になります。年内に進学先が決まって遊んでしまうよりは、最後まで頑張って勉強した方がいいに決まっています。辛抱強く学ぶ意欲を身につけるのに最も適した受験だと言えるでしょう。

時間がかかる、手間がかかる、君たちはこれらを嫌う風潮の中に生きています。しかし人が成長するには手間暇がかかるのです。ゆっくりと時間をかけて身につけたものは能力も、筋肉でさえも容易に失いません。ですから私は君たちに手間暇のかかるものに挑戦してほしいのです。最後まで頑張ってくださいね。

今週のおすすめ

・道尾秀介 『N』（集英社文庫）

これは普通の連作短編集とは違います。六編の短編集なのですが、読む順番はどこからでも結構ですと。そうすると、何通りの組み合わせができるか。6の階乗ですから $6 \times 5 \times 4 \times 3 \times 2 \times 1$ で 720 通りですね。どうしてこんなことを思いつきますかね。普通の連作短編は、主人公は一人で設定の違う物語が綴られます。時間軸も守られるか、あるいは途中で回想シーンが入るかです。『光媒の花』は第一章の脇役が第二章では主人公となり、第三章では第二章の脇役が主人公に、そんな連作でした。これもまた意欲作ですが、『N』は、だいたい本の構成が普通と違って、一章ずつ上下に印刷されています。見てもらわないとピンと来ないかもしれませんが、仮に最初の章から順番に読むとすると、まず 86 ページをめくって本を逆さまにして読み始めなければなりません。次の章は 89 ページから本を上下元に戻して読みます。私はそうして順番通りに読みました。面白かったのと同時に、道尾さんの構成力に感心しました。解説のタカザワケンジさんの言葉を借りると『N』は読む順番によって、書かれていることが謎になったり、ただの事実になったりする小説なのである」とのことですが、おっしゃる通り。全編を読むと一つの壮大なドラマが浮かびます。もうすぐ冬休み。720 通りある『N』の読み方の何通りかを読んでごらん。

BGM は 八神純子の バースデイ・ソング でした…。